

<研究ノート>

オルテガ思想における司書像 ー司書の教養をめぐるー

佐藤 雄大

本稿の目的は、オルテガ思想における司書像を明らかにすることである。オルテガは、司書の使命とは、大量にある書物のなかから、未来を生き抜くために必要な書物を選びぬくことであると考え、さらにその選書に必要なもの、「教養」を身に付けることであると主張した。そこで、司書が大学において養成される意味は、教養を獲得することと専門的知識を習得することであり、真に要求されていることは、社会や国家の指導的役割としての司書を輩出することである。

はじめに

本稿の目的は、1935年5月20日にマドリッドで開催された国際図書館連盟 (IFLA) 大会におけるオルテガ・イ・ガセット (Ortega y Gasset) の開会演説「司書の使命 (Misión del bibliotecario)」の内容を題材に、オルテガ思想における司書像を明らかにすることである。

オルテガは、スペインの哲学者・思想家であり、19世紀から20世紀の二つの世界大戦のなか、スペインの再興のため、ヨーロッパにおけるスペインの後進性とその解決策について、教授活動や講演・執筆活動を生涯を通して精力的に行なった教育的・指導的人物である。

そして彼は、大学改革を主題とした講演「大学の使命 (Misión de la Universidad)」(1930)において専門職は、大学教育で養成されるべきであり¹⁾、専門職教育の充実を計ることは、大学改革において不可欠であると主張した²⁾。つまり、彼は専門職教育の強化が大学にとって急務であると主張したことになる。

オルテガは「大学の使命」において専門職の例として医者・裁判官などをあげながら、司書をあげていない。しかし、彼は社会や国家の要請によって、司書や医者や裁判官という職業が存在し³⁾、その社会的、国家的要請に対して大学において専門職の養成が積極的に行われる必要がある⁴⁾と主張したことから、司書も医師や裁判官と同様にその養成の充実が計られるべき対象でありえると考えられることができる。

またオルテガは、大学改革において考慮されるべきことは、大学が公共的環境に依存していることである⁵⁾と述べ、専門職に求められるものは社会的、国家的必要性からであることを主張している。

それによって、オルテガ思想における大学観には、彼の社会的問題意識や時代考察が含意されていることになり、彼の大学観における司書養成について明らかにすることは、彼が司書を論ずる際の当時の彼の社会的問題意識だけでなく時代考察をも明らかにすることになる。

以上を踏まえて講演「司書の使命」を考察した場合、オルテガ思想にとって司書は、社会や大学において、重要な専門職として位置づけられていたことになる。

そこで本稿は、オルテガ思想の司書像を分析する際に、第一に「司書の使命」の演説内容を示す。第二に、オルテガの「生 (vida)」概念における司書の

2011年2月4日受理

さとう ゆうだい

明治大学大学院文学研究科博士後期課程

新たな使命を考察し、その使命における「教養 (cultura)」について明らかにする。第三に、オルテガ思想における大学観と国家観を考察し、「教養」の重要性と必要性を分析する。第四に大学において司書を養成する意味を検討し、そこに求められる「教養」について分析する。

1. 「司書の使命」

本章ではこの演説を、使命論と司書論と書物論に分けその内容を記す。

1.1 使命論

オルテガは、この演説で司書の使命について論ずる前に二つの「使命 (misión)」について論じている。彼によれば「使命」とは、“人が生涯しなければならないこと”⁶⁾である。彼はこれを「個人的使命 (misión personal)」と呼ぶ。また彼によれば「職業的使命 (misión profesional)」とは、社会において人々がしなければならないこと、あるいは仕事である⁷⁾と述べている。

また「個人的使命」は、“実現するように呼びかけられている最も真正な己のあり方について、各人が抱えている自覚である”⁸⁾ (筆者下線)。そして「真正な己のあり方」とは、自らの多くの可能な行動のなかで、その瞬間自らの人生に相応しく、意味を見出せること⁹⁾である。さらにそれが、各人に「呼びかけられている」だけで、それが強制されているわけではなく、提案されているということである。

一方で「職業的使命」とは、社会において「真正な己のあり方が呼びかけられている」ということである。つまり、二つの「使命」とは、自らの、社会の可能性のなかにおいて、それぞれが「真正なあり方」を選択することが自らに、社会に提案されていることである。

従って司書が「個人的使命」である時代は、個人が自らの可能な行動のなかで、「書物 (libro)」を収集し、整理し、目録を作成することを選択するだけであり、その個人が存在しなくなった場合、その仕事を引き継ぐ者は社会に存在しないことになる。

一方で司書が「職業的使命」である時代は、その仕事を引き継ぐことが、社会的な必要性から生じる。よってその仕事は、個人的な観点から行われるのではなく、非個人化された仕事でなければならない¹⁰⁾ことになる。

このように司書が、「個人的使命」から「職業的使命」に移るのには、司書のもつ歴史的重要性の変化である¹¹⁾とオルテガは指摘している。その変移については、次節に示す。

1.2 司書論

1.2.1 司書の誕生

オルテガは、司書の歴史を振り返りながら、司書の社会的必要性の成立を次のように示している。

彼は、ルネサンスの黎明期である 15 世紀におけるグーテンベルグの活版印刷技術の発明による書物の流通の変化を背景に次のように考察した。

司書の姿が一般社会の表面に輪郭を現し、生きてゆくその他の類型から分化し始めた。それはまた初めて最も厳密な意味で書物が、——宗教書でも法律書でもなく、書物が一人の著者によって書かれた、(中略)——必要なものとして社会的に考えられたまさにその時期であったのである¹²⁾。

さらに彼は、この時期書物は社会的な要求というより書物への信仰であったと述べ、神への信仰から人間の理性への信仰に変遷している時期であると分析し、また書物が存在することを必要としていた時期であると述べている。そして彼は、書物への必要性は、印刷術誕生への必要性にも影響を及ぼした¹³⁾と述べている。

そして、16 世紀から 18 世紀までの間に、書物は多く出版され、印刷は安価になり、それが少量しかないと心配することもなく、むしろ目録にのせられる必要性を感じるほどである¹⁴⁾とオルテガは述べている。

19 世紀になると書物は、読書を奨励し、読者を探すほどに大量に存在した。そして社会や国家は「書物」を管理する必要性が生じ、司書という職業が「職業的使命」を担うようになった¹⁵⁾と彼は考察した。

そして彼は、フランス革命以後の民主的な体制は、貴族社会により口述された法律書よりも、人間が書いた書物の勝利である¹⁶⁾と分析した。つまり、彼は、人間が書いた書物が、人々に民主的な社会や国家を作る一つの機会を与え、その結果、民主的な社会や国家が誕生した一つの要因となったと考察した。そして、その社会や国家において、書物がそれらを形成・維持・発展させるために不可欠なものの一つ

となり、社会や国家が書物を管理する必要性が生じたのである。

オルテガによれば、それは、社会や国家が“書物を公の機能であり、基本的な政治機関だと認めた。そのおかげで、司書という職業が官僚機構に変わった”¹⁷⁾ことを意味している。

1.2.2 司書の新しい使命

19世紀半ばまでに、社会や国家に書物が必要とされ、司書が「職業的使命」となると彼は考察し、そして今日の状況を次のように考察している。

それは“書物は歴史の今日の高まりでは不可欠なものだ。しかし書物は危機に瀕している、なぜなら人間にとって一つの危険物に変わっている”からであり、それは“あまりにも書物が多すぎるという印象がある”¹⁸⁾からである。

オルテガは、この大量の書物が存在する状況に対して司書という職業が成熟期にはいったことを意味している¹⁹⁾と主張する。そして、その職業の成熟こそが「新しい使命 (la nueva misión)」である。つまり“生きた (viviente) 作用として書物に配慮しなければならぬ。書物に対して礼儀をつくさねばならないであろうし、荒れ狂う書物の調教師にならなければならない”²⁰⁾こと、または“書物のジャングルのなかで、専門的でない読者を導き、彼らの医者であり衛生管理者でなければならない”²¹⁾ことである。

1.3 書物論

1.3.1 大量の書物における危険性

オルテガは、その大量の書物における危険性について次のように考察している。一つ目は、書物の量が人間のそれを消化する時間と能力の限界を超えていること。²²⁾二つ目は、その状況に対して人々は、読まなければならない全ての書物を読みきれないという無気力と敗北感に遭遇すること。三つ目には、書物が膨大にあることと読書しすぎることで、個人はほんの僅かな努力かあるいは努力なしで読書し、書物の「思想 (idea)」を容易に受けとることである。四つ目は、その安易な「思想」の受容が、自らで考えない、考え直さない、考えた振りをする人間をつくり出していること²³⁾である。

オルテガは、こうした大量の書物の危険性を考察し、先に述べた「新しい使命」を主張したのである。

1.3.2 書物の意義について

オルテガは、この講演の最後に書物それ自体につ

いて考察し、「書物とは何か」と題し、“書物とは「書かれた言葉」である”²⁴⁾と答えている。

そして、彼は言葉が二つの意味を持ち、一つは言葉の外側に離れたところに向けられている場合と、もう一つは、言葉の内側に向けられている場合があると述べる。前者は、「鍵はどこにある？」や「いい人！」など、その言葉を発した目的が、その言葉の先、離れたところにある場合である。つまり、その言葉を発する目的は、ある事柄を起こすこと、ある行動を起こすことである。後者は、幾何学者の定理の発表や詩人のバラの詩の場合である。それは、その言葉を言うことに目的があり、満足がある²⁵⁾。すなわち、彼の発表の目的は、真理探究のためにその定理について言わなければならないことを言うことに第一の目的があり、それによってある事柄が起こること、ある行動を起こすことを第一の目的としてはいない。同様に詩人も、バラについて言わなければならないことを詩として表現することを第一の目的としていて、それによって起こることや起こすことを第一の目的にしていない。

それらの意味の相違は、その状況の瞬間においてその人物に都合の良いことが起こる、それを起こすためにその言葉が言わなければならないこととして発せられたか否かである。つまり、それは、その人物にとって、実現したいことを、有利になること不利にならないことを起こすために、必要な、緊急である言葉、言わなければならない言葉であるかどうかである。

そして、あることについて言わなければならない際に、後者よりも前者の言葉こそが、生きる上で必要性があり、緊急性がある。よって、前者の言葉こそが、保存されることを要求され、書いたものになることを要求される²⁶⁾とオルテガは考察している。

それにより、言わなければならない言葉は保存を要求するが、しかしその言葉の全て、例えば「鍵はどこにある？」という日常的な言葉などが、その要求を満たされることもないことも明らかであり、その中で、社会的に保存される必要があるかないかが、さらに問われている。

以上により彼は「書物」とは本質的に、“模範的な言葉、これが、真正な生きた機能としての書物の瞬間、すなわち言わなければならないことを、実質的に常に言い続けている”²⁷⁾と捉えている。

しかし、彼はその書物の性質、つまり書物の言葉における保存性についてまだ配慮されるべき点があると彼は述べている。

それは、言葉それ自体を保存できたとしても、言

葉が発せられなければならなかった生き生きとした状況や瞬間を、保存することは困難である²⁸⁾。つまり、その瞬間の状況とその感覚は、完全なる言葉の意味として保存されずに消費してしまうということである。

よって、その書物を生きたものとして蘇らせるには、その書物の生きた状況を再生させる必要があるとオルテガは指摘し、それは“その書物を読む前に、問題を自分で考えて、真正さをよくわきまえた人でなければならない”²⁹⁾ことであると考察している。

2. オルテガの「生」概念における司書の使命

前章では、演説「司書の使命」の内容を素描し、オルテガが、司書に求める「新しい使命」とそれに対するオルテガの問題意識を見た。

この章では、彼の「生」概念における司書の「新しい使命」について考察する。

2.1 オルテガ思想における「生」

オルテガは、“生きた作用として書物に配慮しなければならない”³⁰⁾ことを司書の「新しい使命」と捉えているが、まず「生きた作用 (función viviente)」という言葉について、分析する。

なぜなら、この「生きた (viviente)」という言葉は、「生 (vida)」の形容詞であり、この「生」概念こそが、オルテガ思想を貫く概念の一つであるからである。例えば、佐々木孝によると、オルテガ思想において「生」が問題提起されたのは、1910年の「楽園のアダムス (Adán en el paraíso)」であり、1914年の『ドン・キホーテをめぐって (Meditaciones del Quijote)』において、「生」概念が理論的な形態を帯び、その後のオルテガ思想の出発点となっている³¹⁾と分析している。

まずオルテガは、「生」を以下のように定義している。

生とは何よりもまず、我われがなりうるもの、つまり可能な生であるが故に、それは様々な可能性から我われが実際なろうとするものを決断しなければならない。環境と決断、この二つが生を構成する根本的な要素である³²⁾。

このように、彼は「生」を「環境」における「決

断」の総体であると考えているので、「生」を理解するには、「生」としての「環境 (circunstancia)」と「決断 (decisión)」について考察する必要があると考えられる。

2.2 「環境」としての「生きた作用」

「生」としての「環境」は、“混沌であり、密林であり、紛糾である。人はそのなかで迷う”³³⁾とオルテガは捉えている。

従って彼は、生とは困難な存在であり、問題多き存在³⁴⁾であり、多くの不確実性をはらんだ「環境」であると考えている。よって「生きた作用」とは、「生」という可能性である「環境」による作用ということになる。

そして、その作用が書物に働いていることを「生きた作用としての書物」と彼は呼んだのである。つまり書物は生きていることの不確実性をはらんでいるということである。

故に彼が、司書の使命は“書物という生きた作用の整調であり、状況を配慮しなければならない”³⁵⁾と述べたのは、司書に対して書物の生きている「環境」として不確実性に配慮しなければならないという意味である。つまり、言わなければならない言葉として外側に発せられたその状況を、消耗させることなく、現在に生き生きとしたものとして、司書は書物を扱わなければならないということである。

そして、この書物の生きた不確実性を含んだ可能性を引き出すことが、すなわち書物のもつ意味を現実に発揮させることが、司書の役割であると考えられる。

それは、もう一つの「生きた (viviente), (vivo)」という言葉の意味であり、「生きた信仰 (fe viva)」という意味での「生きた」という意味である。この場合のそれは、先に述べた「環境」としての「生」それ自体ではなく、言葉の意味する生き生きとした「環境」が把握され、保存された書物における「生」の作用を意味している。

オルテガは「生きた信仰」と「死んだ信仰 (fe inerte)」を次のように捉えている。前者は生きていくために不可欠な信仰であり、後者は何かを信じてはいるが、それが生きることに役立たない信仰である³⁶⁾。つまり、この「生きた」という言葉は、「生きるために必要な、不可欠な」という意味である。

従って、「生きた作用」のもう一つの意味は、「生きるために必要な、不可欠な作用」ということにな

る。

以上、「環境」における「生きた」という二つの意味を踏まえて、司書の「新しい使命」を考察すると、それは、言わなければならない言葉としての書物の本来の意味を発揮するには、生きるために不可欠なものとして活かすことであり、その書かれた言葉の生き生きとした状況を再現し読み取らなければならないということであると理解できる。

これで、「書物という生きた作用を整調し、その状況を配慮すること」とは、その書物が生きるために言わなければならないこととして、書かれた言葉の状況を読み解かなければならないということであると言える。一方の「決断」としての「生きた作用」に関しては、次節で考察する。

2.3 「決断」としての「生きた作用」

司書が「生きた作用としての書物」において「決断」するとは、“荒れ狂う書物の調教師にならなければならない”³⁷⁾ こと、あるいは“書物のジャングルのなかで、(中略)、彼らの医者であり衛生管理者でなければならない”(筆者下線)³⁸⁾ ということである。

つまり、「荒れ狂う書物」や「書物のジャングル」とは大量になる書物の危険性のことであり、それに対し「調教師 (domador)」そして「医者 (medico)」や「衛生管理者 (higienista de sus lecturas)」であるとは、その危険性を排除し、有効に扱うということである。

オルテガは、書物の氾濫により、書物が、その本来もつべき言わなければならない言葉として、生きるための機能以外に多数存在していると分析し、それは利益を得るための書物や名声を得るための書物など、何か言うべき何かをもたないまやかしの書物である³⁹⁾ と述べている。

また、そうした「生きた作用」としてではない書物の氾濫により、そこに埋もれている「生きた作用としての書物」を見つけ出さなければならない。つまり、大量の書物の危険性の他に、「生きた作用」としてではない書物の危険性があり、それはそのなかに「生きた作用としての書物」が埋もれてしまうということである。

従って「生きた作用としての書物」において「決断」するとは、書物の「調教師」として、「医者」・「衛生管理者」として、膨大な書物のなかからいかに「生きた作用としての書物」を選ぶかということ、またそ

の書かれた言葉の生き生きとした状況がいかなるものであるかを「決断」することである。

彼によれば“人間は自分で自分を形成しなければならないというだけではない。彼のなさなければならぬ最も重大なことは、自分になろうとするものを決定するということ”⁴⁰⁾ であり、さらに“人間は、自分を取り巻く環境についての十分な認識を得たとき、その能力を最大限に発揮する”⁴¹⁾ ことである。

つまり、その「環境」において司書が「司書の使命」としてやらなければならないことを「決断」しなければならないのである。

そしてオルテガによれば「司書の使命」は、大量の書物の危険性と「生きた作用」としてではない書物の危険性について考察し、書物の量と質について配慮し「生きた作用としての書物」を選ぶことを決めなければならないのである。

以上のような「環境」において、司書は「職業的的使命」としてしなければならないこと、「決断」しなければならないことがあり、彼はそれを大量にある書物の「調教師」や「医師」になることであると主張している。

こうした彼の大量にある書物における危険性についての考察は、大学教育における考え方においても適用されている。彼は、それを「教授における経済的原理 (principio de la economía en la enseñanza)」⁴²⁾ と呼んでいる。

それを記すと、人間が確実に快適に困難に陥ることなく生きていくためには、非常に多くの知識を必要とするが、平均的な学生には、限られた能力しかいないため、一定の量の学習でしかそれを習得することができない⁴³⁾ ということである。

従って、そこにオルテガは教育の重要性和教育学の意味があると主張し、教授内容・方法の合理化⁴⁴⁾ を提案するのである。

よって書物もまた読者の能力に合わせ、また生きていくために必要最低限の分量にされるべきであると、彼が分析していると考えることができる。

また「生きた作用」としての選書の基準は、「生」の考え方に一致し、また社会的な必要性から生じた「職業的使命」と合致する。

なぜなら、オルテガは司書の「新しい使命」を次のようにも述べているからである。

不要な書物が出版されるのを避け、その代わり、それぞれの時代での、生き生きとした

問題の体系を要求するような書物の欠如を防ぐ目的で、書物を調整するように、社会から委託されること⁴⁵⁾ (筆者下線)。

社会から委託されることは、社会的な要求であり、「生き生きとした問題の体系 (sistema de problemas vivos) とは、以下のことである。

オルテガは、「生」は課題であり、生存の困難さのなかにある⁴⁶⁾と捉えているので、各時代の「生」には、「生」の不確実性に対して「真正なあり方」をめぐる「決断」がなされている。よって、その時代のもつ諸問題に対する解決についての考察や分析が、「生きた」書物として含まれている。

しかし、現在は書物の氾濫により、本来の意味をもち得ていない、「生きた作用」としてではない書物が存在しているが、「書物」には本来「生きた作用」が付与され、付与されなければならないのである。

つまり、書物には生きていくために言わなければならないことを言い続ける目的が、社会的に要求されている。

そして、そうした社会的な要求に対して、人間は「思想 (idea)」と「教養 (cultura)」を発明したのであり、それらを未来へ残すために「書物」が必要とされ、生きていくために不可欠とされた⁴⁷⁾とオルテガは分析する。

彼は、「思想」を“その人の苦しい困難を、のびやかで軽快な安易さに換える素晴らしい装置”⁴⁸⁾と捉え、「教養」を“生の難破を防ぐもの、無意味な悲劇に陥ることなく、過度に品格を落とすことなく、生きていくようにさせるもの”⁴⁹⁾と捉えている。

そして、彼によれば「思想」とは、「教養」の一部であり、構成要素、つまり「教養」とは、「生きたいくつかの思想の体系 (la sistema de ideas vivas)」であり、「現実的な確信のレパートリー」⁵⁰⁾である。また彼によれば、それらは生きるための絶対的な答えではなく、基準であり道標でしかないのである⁵¹⁾。

一方、「生きたいくつかの体系」である「教養」は、「生きた作用」を付与しているので、「生きた作用としての書物」を司書が選書する際に必要とされるのは、「教養」であると考察することができる。

つまり、オルテガの主張する司書の「新しい使命」そして「生きた作用としての書物」には、「教養」が求められるということである。

また、オルテガの考えによると、「教養」は、自らで作り上げるのではなく、享受するものである⁵²⁾。

そして、大学が社会や国家に「教養」を伝達し、専門職を排出する役割を担わなければならない⁵³⁾。よって、司書が「専門職」として養成され、「教養」を伝達される場所は、大学となる。

3. オルテガの大学観と国家観における教養

前章で「生きた作用としての書物」について明らかにするなかで、司書の「新しい使命」に対して「教養」が求められることが理解できた。本章ではオルテガの大学観と国家観における「教養」を考察し、「教養」の必要性について検討する。

3.1 大学教育における「教養」

オルテガは、この演説を行う5年前の1930年に「スペインの大学改革」について講演⁵⁴⁾を行い、自らの大学観を明らかにしている。そこで、彼は大学が大学としての真正さ⁵⁵⁾から問い直し、大学の使命を明らかにしなければならない⁵⁶⁾と主張した。

そして、彼は大学が三つの社会的な機能、(1) 教養の伝達、(2) 専門職教育、(3) 科学研究と若手科学者の養成⁵⁷⁾、を有していると考察した。そして、オルテガは大学教育において第一に重要であるのは、「教養の伝達 (transmisión de la cultura)」であると主張し、次のように述べた。

高等教育では、第一に、教養の教授、すなわち、過ぎし世代に成熟した、世界と人間とに関する諸理念の体系を、新たな世代に伝達することにあるとして、そのための運動が力強く進められつつあるのである⁵⁸⁾ (筆者下線)。

上記で彼は「教養」を「諸理念の体系 (sistema de idea)」⁵⁹⁾と述べているが、より正確には、教養により時代が生きているところの諸理念の体系であり、“世界及び同胞の本質に関する、また、諸事実、諸行為のとり値の位階——いずれがより高く、いずれがより低く評価されるかの位階に関する、我われの現実的な確信のレパートリー”⁶⁰⁾と表現している。つまり、彼は、その時代ごとの生きた世界観を、あるいは世界を構成している生きた価値観を、過去から未来に伝えることが、「教養」教育であると捉えている。

従って、「司書の使命」に沿えば、「環境」として「生きた作用」において配慮されることは、その書

物がいかなる理念の体系のなかに生まれたのかということであり、一方で「決断」としての「生きた作用」として考慮されることは、現在生きている時代における「諸理念 (idea)」と過去の「諸理念」のなかから、未来への不確実な世界において生きるために、必要な書物を「決断」することである。

そして「大学の使命」は、次の対象者を想定している。オルテガによれば「教養の伝達」と「専門職教育」の対象は、「平均人 (hombre medico)」⁶¹⁾である。その理由は、大半の学生は、平均的な能力であること、さらに制度というものは平均的な能力を基準としなければならない⁶²⁾と彼は考えているからである。さらなる理由は、「平均人」とは「大衆 (masa)」であり⁶³⁾、その「大衆」が「無教養 (incultura)」である⁶⁴⁾からであると彼は分析している。

3.2 「無教養の時代」

3.2.1 「無教養の時代」の歴史的背景

「平均人」あるいは「大衆」が、「無教養」であるのは、「教養の伝達」がなされていないからであるとオルテガは考察する。なぜなら、大学教育において、「専門職教育」と「科学研究」を拡大しすぎてしまったからである⁶⁵⁾と彼は述べている。またそれらを拡大させることで科学技術が進歩し、経済が繁栄し、その結果としての「大衆」と「平均人」が「無教養」になったのである⁶⁶⁾と彼は分析している。なぜなら、経済的繁栄による爆発的な人口増加が、質的な存在でなく、量的な存在である「大衆」を生み出したからである⁶⁷⁾。

そして、オルテガによれば、教養教育の縮小を成功させた原因は、民主主義的デモクラシーの誕生であると考えられ、その登場により人々は、過去のどの時代よりも生まれながらにしてその身分や階層のような社会的差別がなくなったのである⁶⁸⁾。

この文明の恩恵によって、「平均人」と「大衆」は努力なくして歴史上稀にみる物質的に社会的に優れた「環境」を手に入れた。従って、彼らは以前のような「生」に対する不安や危険を感じないので、危機を生きるための「教養」を必要としないのである。彼らは、世界が文明の恩恵によって何も変わらず安全で快適にあると根拠なく信じているのである。つまり彼らにとって文明とは空気のように当たり前のものと言える⁶⁹⁾。

以上のオルテガの考察から、19世紀の高度な文明

により、ヨーロッパは「生」としての「可能性」は増大し、物質的には豊かな時代となったが、一方で精神的には「無教養の時代 (la incultura de los tempos)」になったと考えられる。

3.2.2 「無教養の時代」における国家

「無教養の時代」においてどのような危険があるのか。それは、「無教養」である「平均人」と「大衆」が、「知的閉鎖性 (hermetismo intelectual)」に陥り、「直接行動 (action direct)」を企て、社会や国家が「分裂主義 (particulars)」を起こすことである。

まずオルテガは、「知的閉鎖性」とは、先に述べたように文明の恩恵によって、彼らの取り巻くその「環境」について無自覚に至り、一切の疑いもなく自らは全ての人と同じであり⁷⁰⁾、他人と変わることはない人間であると考え、そして自分は完全な人間だと錯覚する⁷¹⁾ことであると述べている。その結果、そうした人間は、自らよりも優れたものを積極的に求めることをせず⁷²⁾、他人を配慮しなくなると彼は分析した。

つまり、自らの意見や行動において自らの疑い、そして他人に助言を求め、聞き入れることを妨げそして省くのである。そして、「彼らはあらゆることに介入し、何らの配慮も内省も手続きも遠慮もなしに、つまり「直接行動」の方式に従って、自分の低俗な意見を押し付けることになる」⁷³⁾と彼は考察する。

そして、彼はその「直接行動」が社会や国家に「分裂主義」を引き起こし、衰退をもたらせる⁷⁴⁾と考察した。

3.2.3 「無教養の時代」における「大衆」と「少数者」

オルテガは、“社会というものは常に、少数者と大衆という二つの要素からなるダイナミックな統一体”⁷⁵⁾であり、“国家の形成は、その成員全体に最高度の恭順、つまり服従と相互依存を要求し、それへと人びとを駆り立てる強力な事業を中心になされる”⁷⁶⁾と捉えていた。社会や国家における関係性は、「少数者 (minorías)」の「模範性 (ejemplaridad)」と「大衆」の「従順さ (docilidad)」によって表すことができる。彼によれば、国家は同質的な共同の拡大ではなく、異質的な共同体の「統合」であるから「分裂」を起こす⁷⁷⁾。

その統合する力は、「生のプログラム」⁷⁸⁾や「国家を形成する力」であり、「支配する力」である。オルテガはそれらの力は、物理的な力だけでなく、精神的な力でもある⁷⁹⁾と述べている。つまり、異質

な集団を束ねるためには、明日に、不確実な未来に向けて共同して立ち向かう計画、あるいは共同生活と呼び掛ける計画が、必要である⁸⁰⁾と彼は主張している。

そして彼は、その精神的な力を「模範性」と呼び、それを支持する態度を「従順さ」と表現した。つまり、その計画を成功させるためには、第一に「少数者」、つまり優れた人物が「大衆」によって作り出されなければならない⁸¹⁾。第二に、少数者が共同生活と呼び掛ける計画を立てなければならない。そして最後に、その計画に対して「大衆」が支持をしなければならない。

従って、以上のオルテガの分析から、国家の形成において、「少数者」の精神的な力と「大衆」のそれを見極める精神的な力、双方の力が不可欠であり、それは相互依存的な関係性が必要であると考えられる。

しかし、国家が「分裂主義」に陥った場合、「少数者」は、「大衆」に優れた人物と認められ、共存のための計画を支持されるような「模範性」を失う。一方で、「大衆」はそれらを認め支持する「従順さ」を損なう。

つまり、他人を認める態度や優れたものを求める姿勢の欠如は、「少数者」の存在と計画を拒むのである。そして「間接行動 (acción indirecta)」つまり議論や討論などの他者との意思疎通を省き、「直接行動」を起こし、自らの主張を押し付け、共存ではなく独立を企てようとするのである⁸²⁾。

以上により「直接行動」が国家の「分裂主義」を引き起こす。それは、国家において部分としての異なった共同体が独立し、国家が分裂し衰退していく現象である。

従って、国家が「分裂主義」に至らないためには、「少数者」の不確実な未来に向けて共同して立ち向かう計画を企てる力とそれを見極める「大衆」の力が、必要であり、それは「教養」の必要性であると考えられる。なぜなら、「大衆」は「無教養」であり、それが「知的閉鎖性」を、そして「直接行動」を引き起こすからである。

4. 大学教育における司書の養成

前章では、オルテガ思想において「教養」がいかなるものであるかを考察しながら、オルテガの大学観に見られる「教養の伝達」の重要性を、またその

問題背景を明らかにすることができた。この章では、大学教育において、司書に求められる「教養」と専門職教育に求められることを明らかにする。

4.1 大学教育における専門職養成

オルテガによれば、専門職に求められるものは、当然ながら専門的知識である。なぜなら、社会において専門職を必要される理由は、それが社会において不可欠であるからであり、つまり専門的に知識を身に付けなければならないほど、複雑な知識が必要であるということである⁸³⁾。

しかし彼は、専門家が「大衆化」する、つまり専門家が「知的閉鎖性」に陥る可能性について指摘している。彼によると、専門家の大衆化の例として「科学者」の大衆化をあげ、科学が進歩するにしたがい、科学における知識は複雑になり、専門化することで、科学者は自らの分野にしか興味を抱かなくなり、自己閉塞に陥る。そして科学者は、本分である他分野との統合や宇宙の総合的解釈を怠るのである⁸⁴⁾。また彼らは自らの分野において知者であるという優越感から、他分野においても同じく知者として振舞おうとし、「直接行動」、つまり他者を無視し、自らの意見を押し付けてくるのである⁸⁵⁾。

従って、専門職の養成に際して重要であることは、自らの専門的分野を学び研究しつつ、他分野との関係性や総合的解釈、つまり、世界がどのような価値観によって構成されているのかを知ることである。

オルテガは、それを踏まえて、“無教養の人間にして、真に良き医師、良き裁判官、良き技師でありうるとは到底考えられない”⁸⁶⁾と主張している。

なぜなら、専門家にも、専門職以外、先に述べた「支配する力」、つまり“その時代の高さにかなって生き⁸⁷⁾、生氣ある影響を社会に及ぼす能力”⁸⁸⁾を求めていたからである。

よって、「教養」を身に付けるためには、「諸理念の体系」を知らなければならず、その教授内容は、以下の五つで構成される⁸⁹⁾と彼は述べている。

- (1) 物理学的世界像 (物理学)
- (2) 有機的生命の根本問題 (生物学)
- (3) 人類の歴史過程 (歴史)
- (4) 社会生活の構造と機能 (社会学)
- (5) 宇宙のプラン (哲学)

そして、この考えに新たに加えなければならない六つ目の内容は、「専門分野での世界観あるいは体

系」である。なぜなら、専門職は、その自らの分野における知識を身に付け、一方で「教養」を獲得する必要があるが、その専門職における世界あるいは社会における捉え方やその歴史を学習する必要もあると考えられるからである。

そして、専門家が「知的閉鎖性」に陥らないためにも、世界における自らの分野の位置や他分野との関係を知ることが、全体的な「教養」を獲得するためにも不可欠であるからである。さらに、専門家が自らの分野に深化するためにも、その専門的知識が「教養」としての「生きた作用」として機能しなければならないからである。

以上により、専門職には社会を先導するためにも「教養」が必要であり、また各分野における専門的な「教養」も必要であることが、明らかになった。

次節では、司書に求められる以上二つの「教養」について考察する。

4.2 教養教育と専門職教育における司書

以上のオルテガの大学教育における考え方を踏まえて、司書について考察すると、司書に求められるのは、「教養」と専門的知識としての「教養」である。さらに、司書にも専門職として社会に影響を与える能力が求められ、それは「司書の使命」であると考えられる。

なぜなら、司書という職業が歴史的、社会的な必要性から出発しなければならない⁹⁰⁾、多大な書物から、平均人のために選書をしなければならない⁹¹⁾と彼は考察しているからである。

よって、司書に必要な「教養」は、その「時代の高さ」に立ち、その時代の世界がいかなる理念や価値によって構成されているかを考察することである。そして、司書の専門的な知識としての「教養」は、「生きた作用」として、その時代に必要あるいは未来に保存すべき書物を選ぶ能力である。

つまり「生きた作用」としての書物を選ぶ前に、司書が“問題を自分自身で考えて、小道もよくわきまえた人でなければならない”⁹²⁾のである。この「小道 (veredas)」とは、オルテガにとって「教養」を意味する。それは、「教養ある人」を以前は「啓蒙された人 (hombre ilustrado)」と呼び、それは満ちみちた光のもとで生の道を見通しうる人物のことであり、「照明・啓蒙 (iluminación, ilustración)」とは、暗闇のなかの人の目に光を与えることであるからである⁹³⁾。

従って、「教養」ある司書は、混沌たる、紛糾たる「生」のなかに「平均人」や「大衆」に対して、精神的な道標になるのである。

そして、オルテガの「大学の使命」は、大学が精神的な権威になることである⁹⁴⁾。つまり、大学教育で司書が養成される意味は、教養人として、時代に生きた「教養」、また専門職として社会に影響を与えるべく「教養」を身に付け、またそれを伝達することである。

しかしオルテガによれば、書物と司書の登場により、大量の「教養」を伝達することを可能にし、民主主義を誕生させ、「大衆」が「大衆」でなくなるはずであったが⁹⁵⁾、先の考察のように事態は予想の通りではなかった。

だからこそ、オルテガは大学改革において「教養教育」を拡大し、またその教授内容と方法を「経済的原理」により合理化することで、以前よりも容易に「教養の伝達」を可能にし、それを「専門職教育」に取り入れ、その影響力と必要性を与えることを主張した⁹⁶⁾のである。大学において「教養教育」と「専門職教育」が互いに作用することで、「教養」ある司書を養成することが可能となり、それが「司書の使命」と「大学の使命」を全うするために、社会的な要求に応えるためにも緊急であり不可欠なのである。

おわりに

以上により、オルテガ思想における司書像を明らかにした。そこには、国家が直接行動によって、分裂主義にいたる危険性が、オルテガの問題意識として存在していた。オルテガはそれを考察し、大学において教養教育と専門職の養成の国家的な重要性を主張し、司書が大学により養成される必要性を見た。

そこで、司書が社会的に指導的な立場となり、国家の形成に携わる役割を担う必要性を分析することができた。つまり、教養の伝達に欠かせない選書は、社会的な要求に応えることが、不可欠であるということである。よって司書が「教養」を身に付ける必要性は、社会や国家に対し司書が主体的に「教養」を伝える使命から、つまり「教養」ある書物を伝達する使命から生じているのである。

従って、司書は社会共存や国家運営に携わるべき専門職であり、またそれらの教育方針においても主体的に働きかけるべき教養人であると言える。

注・引用文献

オルテガの作品の引用については、Obras de Ortega y Gasset, Madrid:Revista de Occidente en Alianza Editorial と Obras Completas de Ortega y Gasset, Madrid: Revista de Occidente を使用した。オルテガ作品集から引用する場合は、前者を(O.O.,巻数,編集年,ページ番号)の順で、後者を(O.C.,巻数,編集年,ページ番号)略した。例えば、前者(O.O.,17,2008,13)は、作品集17巻2008年13頁を表し、後者(O.O.,7,2007,90)は全集7巻2007年90頁を表す。すべての引用文について、すでに翻訳のあるものは可能な限り使用したが、文脈に応じて訳文や表記を多少変更した。引用文中の下線については、特に指示のない限り原文のイタリック体に沿ったものである。

- 1) オルテガは大学で養成される必要があるのは、第一に教養人、第二に専門職、第三に科学者であると主張している。
- 2) (O.O.,22,2007,59) 井上正訳『大学の使命』玉川大学出版部, 1996, p.50.
- 3) (O.C.,5,1970,215-216) 会田由訳「司書の使命」『オルテガ著作集第8巻』白水社, 1970, p.303-305.
- 4) O.C., 前掲3), p.58. 会田, 前掲3), p.49.
- 5) O.C.,前掲3),p.28-29. 会田,前掲3), p.15-16.
- 6) (O.C.,5,1970,210) 前掲3), p.293.
- 7) O.C.,前掲3),p.214 会田,前掲3), p.301.
- 8) O.C.,前掲3),p.212 会田,前掲3), p.297.
- 9) O.C.,前掲3),p.210-211 会田,前掲3), p.294-295.
- 10) O.C.,前掲3),p.214-215 会田,前掲3), p.301-302.
- 11) O.C.,前掲3),p.216 会田,前掲3), p.305.
- 12) O.C.,前掲3),p.219 会田,前掲3), p.307.
- 13) O.C.,前掲3),p.218 会田,前掲3), p.308-309.
- 14) O.C.,前掲3),p.218-219 会田,前掲3), p.310.
- 15) O.C.,前掲3),p.218-220 会田,前掲3), p.310-311
- 16) O.C.,前掲3),p.220 会田,前掲3), p.312
- 17) O.C.,前掲3),p.220 会田,前掲3), p.313.
- 18) O.C.,前掲3),p.224 会田,前掲3), p.320-321.
- 19) O.C.,前掲3),p.225 会田,前掲3), p.322-323.
- 20) O.C.,前掲3),p.227 会田,前掲3), p.325.
- 21) O.C.,前掲3),p.229 会田,前掲3), p.329.
- 22) O.C.,前掲3),p.227 会田,前掲3), p.325-326.
- 23) O.C.,前掲3),p.229 会田,前掲3), p.330.
- 24) O.C.,前掲3),p.231 会田,前掲3), p.333.
- 25) O.C.,前掲3),p.231-232 会田,前掲3), p.334-335. 専門職は、実際上の活動であるゆえ、現在ある問題を現在ある知識を用いて解決しなければならない。一方で「科学」「科学」は、問題そのものを提起するものであり、現在ある問題の解決という緊急性は浮上しない。
- 26) O.C.,前掲3),p.232 会田,前掲3), p.335.オルテガは、後者の言よりも前者の言葉に、「生きた作用」が、働いていると考えている。「生きた作用」については、第2章を参照したい。
- 27) O.C.,前掲3),p.232 会田,前掲3), p.336.
- 28) O.C.,前掲3),p.233 会田,前掲3), p.339.
- 29) O.C.,前掲3),p.233-234 会田,前掲3), p.339.
- 30) O.C.,前掲3),p.229 会田,前掲3), p.329.
- 31) 佐々木孝「オルテガ哲学における生の理念」『清泉女子大学紀要』No.24,1976.12,p.3-4.その他にも、フェラテール・モーラやホセ・ガオスのオルテガ思想形成区分においても、その基準はオルテガの「生」概念である。
- 32) (O.O.,1,2006,76-77) 桑名一博訳「大衆の反逆」『オルテガ著作集2』白水社, 1969, p.94-95.
- 33) (O.O.,22,2007,35) 前掲2), p.23.
- 34) (O.O.,15,2008,37) 井上正訳「体系としての歴史」『オルテガ著作集4』白水社, 1970, p.321.
- 35) (O.C.,5,1970,230) 前掲3), p.330.
会田訳では、“mise au point (焦点を合わせること)”と訳されているが、筆者はこの文脈をオルテガの「環境」としての「生」と解釈し“mise au point (状況を把握すること)”と訳した方が適切であると考えた。
- 36) (O.O.,15,2008,18) 前掲34), p.292.
- 37) (O.C.,5,1970,227) 前掲3), p.330.p.325.
- 38) O.C.,前掲3),p.229 会田,前掲3), p.329.
- 39) O.C.,前掲3),p.232 会田,前掲3), p.336.
- 40) (O.O.,15,2008,37) 前掲34), p.322.
- 41) (O.O.,17,2008,21) 長南実訳『オルテガ著作集1』「ドン・キホーテをめぐる省察」白水社, 1969, p.26.
- 42) (O.O.,22,2007,25) 前掲2), p.35.
- 43) O.C.,前掲2),p.47 前掲2), p.37.
- 44) オルテガの提案は、生きていくために不可欠であると見なされるものを残すことである。次に、それらをさらに学生が完全に習得し獲得しきれるものにまで最低必要量にすることである。
- 45) (O.C.,5,1970,230) 前掲3), p.328-329.
- 46) (O.O.,15,2008,37) 前掲34), p.320-321.
- 47) (O.C.,5,1970,221-222) 前掲3), p.315-317.
- 48) O.C.,前掲3),p.222 会田,前掲3), p.316.
- 49) (O.O.,22,2007,35) 前掲2), p.23.
- 50) O.O.,前掲2),p.62 井上,前掲2), p.52.
- 51) (O.O.,22,2007,66) 前掲2), p.56-57.
- 52) O.O.,前掲2),p.40 井上,前掲2), p.28.
- 53) O.O.,前掲2),p.78 井上,前掲2), p.72.
- 54) この講演は、オルテガが当時27歳であった1910年から定年の1953年の70歳まで教授職を全うした場であるマドリード大学において行われた。またこの講演において、オルテガはヨーロッパの大学、特にイギリスやフランスやドイツの大学を想定しながら、スペインの大学改革について論じている。
- 55) 「真正さ (autenticidad)」とは、オルテガによれば、自身が周囲の問題を見つけ出し考え、有意義だと結論付けられる答えを導き出すことである。従って、大学の「真正さ」とは、大学が何のために存在し、そこにいなければならないかを、自らで考え、答えを導き出すことである。
- 56) (O.O.,22,2007,26-27) 前掲2), p.13-14.オルテガによると、大学の使命は、以下の点に集約できる。(1)「平均人」を教養人ならびに良き専門家にすること。(2) そのための制度を、最小限度のプログラムを構築すること。(3) 教授職の選択は、研究能力ではなくて、知識の総合的能力と教育者としての能力によって決定すること。前掲2),p.73-74 前掲2),p.65-66.

- 57) O.O.,前掲 2),p.41 井上,前掲 2), p.30.
- 58) O.O.,前掲 2),p.41 井上,前掲 2), p.29-30. 下線は原文のイタリック体に沿ったものである。
- 59) この理念を、オルテガは「生きた諸理念 (idea vivas)」や「それによって人が生きる諸理念」とも呼んでいる。
- 60) O.O.,前掲 2),p.62 井上,前掲 2), p.52. 下線は原文のイタリック体に沿ったものである。
- 61) 「平均人」は、「平均的学生 (el estudiante medio)」や「平均的能力の人間 (el hombre de dotes medisa)」とも表現されている。また「平均人」とは、その時代の象徴的な人間像である。また歴史とは社会の平均から成り立っているとオルテガは捉えている。そして彼は「科学教育」において「平均人」が対象でない理由は、「科学」に従事することは平均的な能力以上を有するので、大学教育における第一の重要性ではないと考えている。
- 62) O.O.,前掲 2),p.41-42 井上,前掲 2), p.31.
- 63) (O.O.,1,2006,48) 前掲 32), p.57.
- 64) (O.O.,22,2007,35) 前掲 2), p.24.
- 65) O.O.,前掲 2),p.35 井上,前掲 2), p.24.
- 66) (O.O.,1,2006,80) 前掲 32), p.99.オルテガは、科学を急速に発達させ、19 世紀ヨーロッパの高度な文明を築いた要因として、デカルトの「純粹理性 (razón pura)」を挙げ、それに対して批判的な態度を取っている。それに関しては、オルテガの『現代の課題』を参照されたい。
- 67) オルテガによると、その最も顕著なデータは、6 世紀から 18 世紀までのヨーロッパの人口は 1 億 8 千万人を超えることがなかったが、19 世紀から 20 世紀の間だけで 4 億 6 千万人に達した事実である。
- 68) O.O.,前掲 32),p.80 桑名,前掲 32), p.99.オルテガによると、以前の人々は「生」とは窮屈で貧窮で圧力であることを考えていたし、知っていた。そうした人びとを彼は、「大衆」ではなく「民衆 (pueblo)」と呼んでいた。
- 69) O.O.,前掲 32),p.110-112 桑名,前掲 32), p.138-141. オルテガは、大衆の文明への認識が、その恩恵を享受するのみで無関心であり、その結果文明を維持することすらできなくなると分析している。
- 70) O.O.,前掲 32),p.49 桑名,前掲 32), p.58.
- 71) O.O.,前掲 32),p.94 桑名,前掲 32), p.117-118.オルテガは、「生」が困難多きものでなくなり、他者と助け合うことを必要としないことで、生きていくことができると分析している。
- 72) O.O.,前掲 32),p.92 桑名,前掲 32), p.114.
- 73) O.O.,前掲 32),p.118 桑名,前掲 32), p.148-149.
- 74) (O.O.,13,2004,69-70) 桑名一博訳「無脊椎のスペイン」『オルテガ著作集 2』白水社、1969、p.308-309.
- 75) (O.O.,1,2006,48) 前掲 32), p.57.
- 76) (O.O.,13,2004,52) 前掲 74), p.288-289.
- 77) O.O.,前掲 74),p.258-259 桑名,前掲 74), p.258-259.
- 78) (O.O.,1,2006,160) 前掲 32), p.198-199.オルテガは、支配するとは「生のプログラム」を企てることであり、「義務 (obligaciones)」や「規範 (normas)」や「責任 (derechos)」を与えることであると考えた。なぜなら、人間の生はその本質上何かに賭けられていなければならないからで、そうでなければ、人間の生は無気力になってしまうと分析しているからである。
- 79) (O.O.,17,2007,37) 前掲 41), p.268.
- 80) O.O.,前掲 32),p.32-34 桑名,前掲 32), p.262-264.ここで、オルテガは、自国スペインの歴史を、つまり 1479 年のスペインの統一、アフリカや中央ヨーロッパ政策を企てていたカスティーリャと、地中海政策を企てていたアラゴンの統一を、踏まえている。
- 81) O.O.,前掲 74),p.71 桑名,前掲 74), p.311.
- 82) オルテガが『無脊椎のスペイン (*España invertebrada*)』(1921) を刊行した頃のスペインにおいて、1910 年代では第一次大戦による好況の後、インフレーションにより、カタルーニャを筆頭に全国規模でストライキが展開した時期であり、1920 年代には、王制が倒されプリモ・デ・リベラ軍事政権が樹立した。この時代は、「分立主義」を背景に、スペイン経済の不安定から、「直接行動」による独立運動と労働運動が激化し、また軍部台頭が起こったのである。
- 83) (O.O.,22,2007,37) 前掲 2), p.25.「職業」とは、歴史的に社会に必要とされることにより発生することであり、それは「個人的使命」ではなく「職業的使命」であり、「社会的使命」であるとも言える。
- 84) (O.O.,1,2006,129) 前掲 32), p.163.
- 85) O.O.,前掲 32),p.131 桑名,前掲 32), p.165.
- 86) (O.O.,22,2007,39) 前掲 2), p.28.
- 87) 「時代の高さ (altura de los tiempos)」とは、その時代の生 (活) の水準を、また歴史的な「生」のあり方を示すものである。従って、「その時代の高さになんて生きる」とは、現在の「生」と過去の「生」を比べた場合に、現在の「生」が歴史的にどの高さにあるのかを理解し、それを考慮することである。
- 88) O.O.,前掲 2),p.38 井上,前掲 2), p.26.
- 89) O.O.,前掲 2),p.53 井上,前掲 2), p.43.
- 90) (O.C.,5,1970,216) 前掲 3), p.305.
- 91) O.C.,前掲 3),p.229 会田,前掲 3), p.329.
- 92) O.C.,前掲 3),p.234 会田,前掲 3), p.339.
- 93) (O.O.,22,2007,74) 前掲 2), p.56-57.
- 94) O.O.,前掲 2),p.78 井上,前掲 2),p.72.
- 95) (O.C.,5,1970,221) 前掲 3), p.314.
- 96) (O.O.,22,2007,40) 前掲 2), p.28.